

西鶴の諸国ばなし

ぬけ穴の首

広末 保作
山崎英介 絵



西鶴の諸国ばなし

ぬけ穴の首

広末 保作
山崎英介 絵

平凡社

——作者紹介——

広末 保（ひろすえ たもつ）

1919年高知県生まれ。東京大学国文科卒。

法政大学教授。

著書「芭蕉と西鶴」「もう一つの日本美」

「悪場所の発想」など。

山崎英介（やまざき えいすけ）

1937年東京生まれ。東京イラストレーター

ズクラブ会員。サン・アド所属。

ぬけ穴の首

定価 八八〇円

一九七二年九月二〇日 初版第一刷発行

作者 広末 保

発行者 下中邦彦

発行所 株式会社 平凡社

東京都千代田区四番町四の一

郵便番号 一〇二

電話 東京（〇三）二六五—〇四五（大代表）

振替 東京二九六三九番

印刷 東洋印刷株式会社

表紙印刷 永井紙器印刷株式会社

製本 株式会社 石津製本所

© 広末 保 1972

8093-329010-7600

絵
・
も
く
じ







もくじ

牛と刀

七

狐の四天王

二七

真夜中の舞台

四九

ぬけ穴の首

六五



お猿の自害

八九

帰って来た男のはなし

一〇三

わるだくみ

一四九

あとがき

一九三

装幀 山崎英介

牛
と
刀



いやもう、欲に目がくらむと、兄弟中でもたちまちいさかいはじまるといったことがないわけではない。

信濃の国の浅間のふもとに、松田藤五郎という大百姓がいた。今年もう八十八歳、これだけ長生きすれば、この世になんのおもい残すこともないのだが、ただ気がかりなのは、藤六、藤七という二人のむす子のことで、いよいよ大往生が近づいたとき、枕もとに二人のむす子呼んで、

「どうやらわしにも仏の国からお迎えがきたらしい。こればかりはいやだといっても、ことわれるわけのものではないし、きょう、あすのうちに先祖さまのいるところに出かけようと思うが、そのあとの財産は、釜の下かまの灰までも、仲良く二つに分けて取るがよい」

そういうとおやじさんはしばらく黙だまっていたが、やがて枕もとに置いてあった刀のほうに目をやると、「さて、この刀は、おもいがけなくわしの命を助けてくれて、おかげできょうまで長生きできたが、そ

れ以来わが家の宝物になっているものだ。よいか、よくよくたいせつにして、たとえ牛は売るようなことがあっても、けっして手放してはならないぞ」といった。

見たところ、どこと違って変わったところのない、それどころか、そこらにいくらでもころがっていそうなその刀に、どんな神秘的な力がひそんでいるというのだろうか。藤六も藤七も不思議でならなかった。しかし、百姓にとって、牛は畠を耕すためにはなくてはならないものである。その牛を売らねばならないような破目^{はめ}になっても、この刀ばかりは手放してはならないというのだから、外見の造りは貧弱でも、中身は余程の名刀にちがいない。そうおもって藤六はいった。

「おいしいつけ通り、家の宝物としてたいせつにいたしますから、どうぞご安心下さい」
藤七もいった。

「必ず必ず、子子孫孫^{ししそんそん}までたいせつにいたします」

おやじさんは、うなずくと目を閉じた。それから、もうふたたび目をあけなかった。

親類の者や村の人たちが大勢集まってきた。

「八十八まで長生きしての大往生だから、まあまあ目出たいことだ」という人もいた。さすがに、藤六

と藤七は目を赤くしていた。八十をすぎた老母は、まだ達者だったが、耳は遠くなっていた。そうして、耳の遠いのをよいことにして、一人で隠居屋に引きこもっていた。「どうせわたしも、すぐあとから追っかけてゆくことになるのだから」といわんばかりのようすで、いつもと変わらず、子供たちの野良着を繕っていた。

葬式は盛大だった。墓から帰ってから、みんな食べたり飲んだりしながら、藤五郎のおもいで話をしていた。そのうちだれかが、「藤六さんも藤七さんも、たくさん財産を残してもらって、仕合わせなお人たちだ」といった。「ほんとにねえ」と、ほかの人たちもうらやましそうにいつて、ため息をついた。それを聞いていた藤六と藤七は、神妙な顔つきをしていた。

「ありがたいことです。何もかも、おやじとおふくろのおかげです」

ところが、おやじさんが死んでまだ七日もたたないうちだった。藤六と藤七は、もう遺産の分配をめぐってけんかをしはじめたのである。

釜の下の方まで二つに分けろといわれたのだが、いざ実際に分けるとなると、なかなか公平にはいかない。お金だけならかんだんだが、家屋敷や畠や山や牛や、いろいろあって、どう分ければ公平になるのかむづかしいから、少しでも自分の取り分をよくしようと、毎日、朝から晩まで、二人はいい争って

いる。恥はも外聞がいぶんもあつたものではない。あんまりみっともないので、親類の年寄りたちが注意しても、一向に耳をかそうとはしない。

それでも十日程いい争つたあげく、なんとか話がついたらしく、親類の者たちもほっとしたが、それもつかの間、今度は例の刀をめぐって、前よりいっそう深刻しんこくに口論くわんろんしだした。親類の者たちには、こんな二束三文にぞさんもんのような刀のことで、なんでそんなに必死になるのか、さっぱりわけがわからない。藤六に聞いてもよくわからない。藤七に聞いてもよくわからない。どうやら本人たちにもよくはわかっていないらしいのだから仕方がない。仕方がないけれども、ほうっておくこともできないので、親類中で一番の年寄りがいった。

「なんといつても惣領そうりやうだから、この一腰ひとこしは藤六に渡してやったらどうか」

しかし、弟の藤七は、絶対に「うん」とはいわない。兄は兄で、なにがなんでも自分のものにしようとする。みんなもう仲裁ちゆうさいのしようもなくなって、そのまま何日も日がすぎたが、ある日、おもいあまつたように、兄の藤六がいった。

「二つに分けたこの家の財産を、全部、釜の下くまのしたの灰まで、藤七にやろう。おれはいつさいの権利を捨てる。その代わりに、この刀はこっちにもらおう」



こうはいったものの、藤六はいかにもくやしく、残念でならないといった顔つきである。だがここが思案のしどころである。刀には代えられない。この刀一本から、どんな財産が生まれるかもしれないのだ。親類の者たちは考えた。「藤六のこの申し入れをけったら、もう話し合いは完全に決裂するだろう」。そこで、一番の年寄りが、藤七をなだめて、この交換条件を受けさせることにした。藤七は、まだ刀に未練があつた。しかし、藤七もここが思案のしどころだとおもつた。家屋敷も畠も山も牛も、刀のほかはいっさいがっさい自分のものになるのだし、それに弟だから、このへんで手をうつても仕方がないとおもつた。

翌日、旅仕度をした藤六は、一本の刀を大事そうに下げて、門の外に立っていた。藤六には、もう住む家がなかった。で、ちょっと心細くなつたがすぐ氣を取り直した。こんな田舎で泥んこになつて牛を追っているよりは、もっともっとすばらしい未来を、この一本の刀が約束してくれているではないか。藤六はそつと刀をなでてみた。門にとまっていた鳥がカァと鳴いた。藤六はそのほうをふり返つて、にっこり笑つた。そうして、意氣ようようと歩きだした。目あては都である。

都までの道のりは遠かつた。藤六には、よけい遠く感じられた。それでも疲れなぞは感じなかつた。楽しい旅だつた。ただ、心配なのは、途中で泥棒に刀を盗まれはしないかということだつた。「あまり

大事そうに持っている、かえって目をつけられるかもしれないぞ」と、そうおもふのだが、もともと、刀なぞ持ったことがないのだから、つい大事そうに抱えてしまう。なんだかおかしくなかつこうで歩いているらしいことは、自分でもよくわかる。侍まじらいのようにはいかなない。「しかし」と、通りすがりの侍の腰に差した刀を見ながら、藤六はおもった。「あんな侍の刀よりも、おれの刀のほうがはるかにりっぱな刀なのだ。百姓が侍よりもりっぱな刀を持って歩いている。しかも、それをだれも知らない」。藤六は、この皮肉なめぐり合わせが愉快ゆかいだった。楽しくてならなかった。

都に着いた藤六は、最初に見つけた宿屋にはいった。もうすっかり日が暮れていたから、そこで泊まることにした。つぎの日、藤六は都見物に出かけた。刀の目利めきをする家をさがすためであった。だが土地不案内の藤六は、目的の家をなかなか見つけることができなかった。宿屋で聞いてくればよかったのだが、聞けば、この刀に目をつけられそうで不安だった。藤六は足を棒にして歩きまわった。そのうち夜になったので、仕方なく宿屋に帰ってくると、なんばいもなんばいもご飯はんのお代わりをして、それから、ぐったりとなつて寝た。

藤六は夢を見ていた。酒盛りをしている。太鼓たいこを打ったり、三味線しやみせんをひいたりしている。都のどこか